

## 飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

### 第 135 回 「街」は生き物、人の寿命を受け継いでいく！

2006.2.5

実にローカルな話で恐縮だが、今年の1月、地元「熊谷市」の産業振興ビジョンを策定、発表させて頂いた。いわゆる有名調査機関、職人的中小企業診断士などが作成する全く無意味な報告書スタイルをぶち破り、ユニークなブレンストーミングタイプのレポートにした。その反応なるや、マチマチで、小さな地方都市でささやかな波紋を投げかけている。

何とも複雑な心境だが、小生、街づくりには頑固な哲学を持っている。

その根底は、「街は生き物」という思想。観光関連の専門コンサルタントとして、はや30年、全国のリゾート観光地、地方都市をくまなく回り、見たり聞いたり。その一番の印象を一言で言うと、「街は生きている」と言うことに尽きる。そこに生活する人が違うように、ひとつとして同じ街は存在しない。個性があり、短所もあり、雰囲気も違う。生き物ゆえ、元気な時も病気気味な時もある。毎日の顔色が違うように、当然、街の顔も日々微妙に変わっている。

ただ一つ違うのは、動植物には「寿命」があるが、「街」はそれを支える人達の寿命を受け継ぎ、永遠までも、生き続ける事ができると言う事かもしれない。

今を生きている我々は、将来の子孫のために「街」の寿命を受け継ぐべく行動を起こし、汗を流し、知恵を絞る義務があろう！「街」を愛し支えるべき「人」が結集し、元気いっ

ぱいの「街」を夢見て、今の自分に何ができるか...そんな事を問い質<sup>ただ</sup>すきっかけとして、書いたり喋<sup>しゃべ</sup>ったり、それを自分自身の役割と認識している。

こんな思想を根底にすれば、自分たちの「街」は自分達で造る、コンサルタント任せにしない参加型の「街づくり」、ランドデザインは自分達で作る、そして行政に頼るのでなく、行政を巻き込む...自<sup>おの</sup>ずからこんな段階的行動になってくるはずである。

いつまでも補助金、助成金に頼らない、利用できるものは利用するが、決して頼らない。前例に拘<sup>こたわ</sup>らない資金調達の工夫。明確なターゲットを持ち、汗を書き、頭を使う収支プランニングを策定。やる気のある人だけが自助努力を繰り返し、停滞のないゴーイングコンサーンを目指す...そう、これは全く企業経営の発想と同じである。

考え方は企業経営と同じだが、絶対的に違うのは、関わる人が従業員ではないという点であろう。一国一城の舵取りが何人もおり、皆好き勝手なことを言い出す中でリーダーシップ、いざという時の無責任体制、専任でなく、しかも直接飯の種でない事業への取り組み姿勢、こんな複雑かつ困難な問題が山積している。地方独特の超保守イズム、社会性の欠如に根ざした醜いまでの人のエゴ、「反対するのが趣味」といった輩の意識改革...

いやはや大変だが、いつか、誰かが見事にクリアした時、「街」は必ず生まれ変わる。